

集団転作の成立条件と地域組織の役割

中原秀人・平川一郎 (福岡県農業総合試験場)

Hidetō NAKAHARA and Ichirō HIRAKAWA : Role of an Agricultural Organization on the Changing Crops in Collectly Drained Paddy Field

1. はじめに

水田利用再編対策第2期における団地化加算金制度の導入を契機に、各地に集団転作が広まり、同対策の一つの指導目標となっている。また、転作物の集団栽培により、互助制度の採用や団地化加算金獲得の結果、転作物の収量いかんによっては水稲所得を上回る収益をあげている農家も少なくない。しかし、その大部分は比較的団地化しやすい平坦地水田地帯で、圃場条件の劣悪な山間地では、団地の指定規準を満たすことが難しく、転作地の集団的利用については、水利の不備や零細分散耕地のため困難なのが現状である。本稿では、そうした山間地にありながら、地域組織の力で集団転作を実施させ、さらにその結束を機会に新たな展開をみせようとする福岡県大牟田市四ヶ地区を取り上げ、山間地における集団転作の成立条件とその意義について検討する。

2. 地区の特徴と集団転作

対象地区は、大牟田市内から峠で区分された3つの谷、4つの集落からなり、耕地面積は79ha(水田50%)、耕地率25%の地区である。農家数は81戸で、専業農家は24戸あり、そのほとんどは水稲・果樹(ミカン、ブドウ)タケノコの複合経営で、近年特にブドウの新植が進んでいる。水田は棚田の狭少な圃場であるために、1977年に設立された大牟田市機械利用組合の圃場作業機械は、十分に活用されていない状態である。

四ヶ地区では、1981年から4年輪換方式による集団転作を実施している。その推進母体となった四ヶ農用地利用改善組合は、旧村の上内地域にある四つの農用地利用改善組合の一つである。大牟田市では、旧村単位での営農集団の育成を図っており、上内地域でも4つの改善組合から上内地域農用地利用改善連絡協議会を形成して集団転作の推進、互助組織の運営を図っている。だが、実際の転作の調整は、組合ごとに独立して実行している。

四ヶ地区の集団転作は、まず各集落段階で当該年度の団地の線引きを行い、次にその結果から過不足分を地区全体で調整する方法で、毎年4～6団地を形成している。しかし、前述のような圃場条件であるために団地化率は65%前後にとどまっている。転作地の利用は、受託組織が存在しないことから集団的利用には至っていない。このことから、転作物の60%を占める大豆も依然低収量(1983年平均138kg)に停滞し、他に商品化される作物も

導入されておらず、保全管理が毎年5%程度残る。

このような変則的な集団転作が成立した条件としては次の6点があげられる。

- ① この地区が他から隔離されている自然条件により地区住民の結束が以前から固く、従来四ヶ地区の農業は集団活動によって発展してきた歴史がある。
- ② 谷間の水田は出入作が混在している。
- ③ 集落ごとにリーダー、担い手が偏在している。
- ④ 1980年、1集落が独自に集団転作を開始しており、全く未知のこの企てではなかった。
- ⑤ 市、農協が集団転作のモデル地区として支援した。

3. 集団転作の効果と問題点

転作奨励金の加算はいうまでもないが、転作実施面積がほぼ割当面積どおりに消化されるようになった。バラ転が行われていた1979年までは、割当面積を大幅に上回る転作(1979年転作率148%)であったのが、集団転作以降は100%をわずかに超える適正な転作面積に調整された。しかし、前述のごとく転作地の土地利用度は低く、転作物の収益も低いために、水稲所得を補てんする収益は実状では確保されていない。

これらのことは、各耕作者に所有する耕地の劣等性を再認識させる結果となった。そして従来、幾度となく燃え上がっては消えていた基盤整備への気運がにわか高揚して、1984年水稲収穫後1集落の小規模転作土地改良事業(4.13ha)が実現した。

つまり、四ヶ地区における集団転作は転作対応だけに止まらず、四ヶ地区農業の根本的かせである圃場条件の改善へとその効果は波及したわけである。

4. むすび

四ヶ地区のリーダーたちの心中には、農用地利用改善組合設立当初から、最終目標は圃場整備事業の実現にあった様子で、さらにその基をたどると、四ヶ農業の振興は果樹部門(ブドウ)の拡大による、という共通認識が基底にあった。そのためには水田から果樹園への労力の移転が必要である。これら結び付けると、集団転作→基盤整備→圃場作業機械の活用→水稲部門の労働の省力化→果樹部門への労働力の移転、という青写真が描かれる。

今後この構想どおりに進展するかどうかは、現状では即断できないが、四ヶ農業が大きく変容しつつあることは間違いない。